

生活の中に園芸を(一)



浅山英一

これを機会に、園芸のたのしさといいものをよく理解していただいて、皆さんの生活の中に植物を育てるといふことをとり入れてみてほしいものだと思います。とくに皆さんが将来、子どもに接する仕事にたずさわっていかれるわけですから、いわゆる情操教育という意味からも園芸はすばらしいことなのです。まず何とも自ら興味を感じ、その意義も感ずるようであればうまくやっています。

それにはまず自分で何か植物を育てることをはじめることが大切です。それは強制するようなことではないのですが、人間がこの世に生まれてこの世に生きているという以上は、草花とか植物を相手にすることが、人間の特権であるということを考え、考えてほしいと思います。

社会が高度にすすむと、なかなか植物など相手にしてられない

いというあわれな人ができてくるのです。人間が大昔、山野をかきまわって生活していた頃、植物や鳥、動物を相手に暮らしていたはずで、今でもそういう姿であっていいはずですが、社会が複雑になって庭もみどりもないひからびた生活しかできない人を生み出してしまったわけです。中には日頃植物などを相手にしなくても過せる人もいますが、それは人間の特権を放棄してしまっているわけです。都会にはそのような人間が大へん多くなっているのですが気の毒なことです。

育てるといふ特権——植物はたねがこぼれて生えるとまず自分の力である程度は育っていきけるのですが、はげしい生存競争に落伍するものもあるのを人が手を添え助けることによってなお立派に育ちます。人は植物を育てるといふことを自分の生活の中にとり入れてそれを利用することのできる叡智をもっています。

お猿や犬がチュースリップを育てたという話もなく、猫がひなげしのたねをまいたという話もきいたことはありません。人間はそれができるのです。

野山にはひとりですべて植物がいろいろ育っていますが、日本の植物は日本の土地に育っても外国のものは必ずしも日本では育たない。しかし人が手をかけてやれば、アフリカの植物も日本で育つようになり、ほうっておいたのでは弱くて絶えてしまうものがその生命を全うすることができるのです。

植物というものは動物に比べると喜怒哀楽の感情も声もないのですが、人間のいうことをよく聞いて正直に反応を示します。大抵人間は家来をほしがります。その証拠には三つ四つの子が可愛い猫や犬を従えて、自分が王様になって歩きまわるといってもそのあらわれです。家来には動物もあり植物もあるのですが、ものいわず素直についてくるのが植物の家来です。人は植物の可憐で純情で美しい様子に親しみをもち、手をかけて楽しみ、その結果に満足できるのです。そのような楽しさが子どもにも大人にも生活の中に盛りこまれば、うれしいことです。ひょうたんが成った、あさがおが咲いたというよろこびはそれを手がけた人だけに判る王様のようなたのしきです。人は自分の生活がたのしければ、結局他の人をもたのしきさせることができるものですか。つまり自分がたのしくなることが必要です。

家庭の設計に、人ばかりがあるのでなく、植物とか動物とかがいることがそれを介して人が互いにむすばれる大きなすがいとなるわけです。家庭の設計ばかりでなく、学校と学校、会社と会社といった社会の小さな一つの単位も植物で結びつけられることは大いにあることでしよう。大いに作意的でもいいから、植物を育てること、園芸を練瓦つみのモルタルのようにとり入れてみてほしいと思います。

園芸は誰にもできること——近ごろは新生活運動とか、街に花いっぱいという運動が盛んで誠に結構なことですが、そのキャッチフレーズに、青少年の非行を防ぐことができるとか、新しい街づくりの有効だとかいう人がありますが、それは本来が逆です。園芸や花を育てる精神はそんなお題目が先に立つものではなく、一はちのパンジーを愛してよく花が咲き、たねもとれたというよろこびが最後はそうなるのですが、功利的な考えで花を育てるのではないのです。

庭はほうっておくと草が生えて仕様がなから花を植えるのだという人がいましたが、草を防ぐのに花を植えるのでなく、花を植えたから当然の結果草とりをしてきれいになったというべきなのです。しかし本当はそういった人も心の中は花が好きだったのにちがいないのです。

さて、園芸とは、そんな理屈をいうことでなく、花が好きなら

は花を、いちごが好きな人はそれを植えればいいわけで、だれにもできるやさしいことなのです。つまり、早くいえば人が自分の心をみたす意欲で、植物を愛して育てるところと技術、即ち芸術だということができます。老人がいちの梅や松を手入れして風格のあるものに育てる盆栽も、小学生がまいて花を咲かせたあさがおの一はちも一つの芸術品といえるでしょう。

たとえば野原の草が勝手に丈夫に育っているのを人間が利用しようと思つて手をかけてもつとよく作る。そのように手をかけることが園芸なのです。あまり手をかけないで育つたものはこれは園芸植物とはいえないのです。広い畑で、半ばほうりっぱなしにして育つ麦やいもなどは園芸作物とはいえません。しかし、さつまいもでもていねいに手をかけて家庭菜園につくれば立派な園芸作物です。狭い面積で、本当によく手をかけて立派なものを作つて、たくさん収穫するように手をかけるのが園芸なのです。ですから園芸植物は草花だけ、野菜だけでなく、相手が植物ならば果物、野菜、花、山草、樹木何でもそういえるわけです。

住宅に庭を作つて、芝生を植えて、木を植えて、自分の生活環境を美しくしていくという仕事も、植物を生活の中に取り入れる点では、やはり園芸の一部分です。ところが、庭を作ることも町の公園の計画だとか、あるいは都市計画だとか、ひいては国土計画だとかそういうことになりますと、これはもう園芸とはいえない

くなります。スケールがもつと大きくなればこれは造園といいます。どうやら園芸ということがどういうものかおわかりだと思いますが、イントロダクションはこれくらいにして、だんだん話をすすめましょう。

みなさんが将来何をなさろうと、自分の生活の中に、草花あるいは野菜や果物など植物を取り入れていくということは大変たのしいものです。そういうたのしみをすでお持ちの人もありますし、そうでない人もありますが、何かチャンスが与えられれば、園芸も大変おもしろくなります。

どうして園芸を好きになつたのかおもしろい話があります。自分の好きな人が苺がとても好きで、苺なら三度三度食べてもちつとも飽きないというので、その人に苺を作つて食べさせたいということがきっかけになって、一生懸命苺をつくっているうちに園芸が好きになつたのです」と答えた。ほんの一例ですけれども、自分がこの世に生きて、生涯の生業をそういうふとしたチャンスで人から与えられる場合がしばしばあるようです。だれでも園芸の好きな方にはそのような何らかのチャンスがあつたことでしょう。小さな時に誰かがチューリップの球根をくれた。植えたら花が咲いた。それでおもしろくなって花作りを始めた、いろいろな人から与えられるチャンスが大変多い。チャンスは自分でつかむことも必要ですけれども、人に与えられることもまた必要な

です。

こうして、自分がそういうことでのたのしむことができたならば、今度は積極的に人にもそういうチャンスを引きあげようという気持ちになります。そういうチャンスをつかまえて欲しいと思います。そうすれば日本中に花の好きな人とか、あるいは野菜作りの好きな人とかが殖えていくことでしょう。そういう人は純真な植物を相手にしていますから、やはり心も素直になってきます。

大体この世の中に住んで一番わずらわしいのは人と人との付き合いです。そんなことをいっていたら生きていけないかもしれません。人が、そういう時に植物は自分の非常に楽しい相手になります。

世の中のわずらわしさから逃げるといふ消極的な意味ではなくて、もっと積極的に花や植物を愛して、そして素直な気持ちになることができればもっときれいな心になると思います。

一人でもこの世の中に花を本当に愛するという人が、殖えてきますと、もっともっと美しい国になるのではないかと思います。

日本人は昔から花や木を愛しているというものは、やはり社会の発達の状態からいうと、欧米の社会人の心構えから、はるかにまだ足りないところがあります。日本人というのは自分の生活はよくやるのです。へいの中の自分の家の中はきれいに掃除しても、そのゴミをみんな表へはきだしてしまふ。自分の庭木は大事にしても公園の桜は平気で折る。まあ、公共性が非常に足りない

わけです。これは一つには島国根性の表われといましようか、となりの人に自分のよろこびを分つよろこびをまだ十分知らないことがその原因であろうかとも思います。日本の国ほど植物に恵まれていない外国人の方が、かえって植物を大事にします。ドイツ人は昔は狩猟をもとにした人種なのですが、そういう意味で動物の心が大変よくわかるのです。そういう心で植物を動物化して取り扱っているようですから、思いやりも植物的ではなくて動物的です。花がしおれていると、「おお、かわいそうに、お水欲しいのか、いいよ、いいよ、今あげるよ」といふような気持ちになる。そういう心を持った人は日本人にもいますが少ないようです。

一、名を知ることは親しみの第一歩

その辺の道を歩いていても草花や雑草はすい分あります。名も無き雑草が生えていたなんてそんなことはありません。牧野富太郎という先生は、もう亡くなりましたけれども、日本中の植物にほとんど全部名前をつけてしまっています。中にはあまり結構でない名前もつけられています。それでもその業績は大きなものです。あの先生が全部名前をつけてしまったので、私どもがつける名前もなくなりました。

ママコノシリヌグイという雑草それはソバの仲間です。茎に逆の刺が一杯生えていて、ちょっと手にさわってもひっかかってヒリヒ

り痛い位です。それが原っぱに一杯生えているのですが、おかあさんがけちけちして継子に紙をくれないので用を足したくなった子どもが原っぱに出て何かないかなあと思っただけでその葉っぱをつかったのです。かわいそうにもかえって継子はお尻に刺がさきさきって痛かったというかわいそうな名前がついています。

どんな雑草にも植物には全部名前をつけてあります。植物を知りたいということならば良かれ悪しかれ、そういう名前を知ることが、やっぱり第一の興味を持ち得るもです。自分が進んで辞書を調べたり教わったりなどして少なくとも自分たちのまわりに普段見られる草花の名前ぐらいいは知っておきたいものです。名前を知らなければ興味も湧かないし、親しみも湧かない。

私がこのクラスに来て塩谷さんとか、宮崎さんとかいう名前を覚えたときです。宮崎さんというのは宮崎県の人で、お家は花屋さんで、学校は何処、特技はタイプライターでななことがわかればだんだんその人に親しみが湧いてきます。そしてそこにつき合いが生まれてくることになるのですが、名前も知らないではやっぱり親しみも湧かない。植物も同じことです。

ヤマゴボウ——今、窓の外に10本位生えている草がありますが、あれは洋種ヤマゴボウといってヤマゴボウ科の植物なんです。あれがヤマゴボウということ先ず教われば自分が知ったという小さな誇りも感じます。ところが名前を知っただけではものたりな

い。少し性質を覚えたり、話を聞いたり、本を読んだりするとさらに興味がわいてきます。洋種ヤマゴボウというのは西洋種だろうと想像もつくでしょう。山に生えているゴボウというわけで、ひっこぬいてみればゴボウのような根があるだろうと思うでしょう。なるほどひっこぬいてみれば、ゴボウのような直根が地の中にはいっています。ところでヤマゴボウというと長野県とか、群馬県などでみそづけの土産を売ってますから、あれかと思うでしょうが、ごぼう根をみそづけにするヤマゴボウはキクの仲間です。アザミの一種で、本名はヤマゴボウではなく、ヤマボクケの一種です。俗に世間で山のゴボウという意味でヤマゴボウというのですが、植物学上の名はヤマボクケというのです。

洋種ヤマゴボウは根を食べたら大変なことになります。一命を失うかもしれません。ところが葉には毒がないのでみそ汁に入れて食べることができます。食べても死にません。ちょっとおつな味がするんだそうです。しかし根には一種のアルカロイドがあって、それを食べると中毒するのです。それをまちがってたべて中毒した話が先日新聞ででていました。

このヤマゴボウには紫黒色の黒い実がなります。その実の汁は白いブラウスとかセーターなどを汚して大へんです。たちまち過マンガン酸カリのような色に染ってしまいます。幸い洗えば落ちるし、実の汁は毒ではないから小さな子どもたちのインクあそび

にするのはさしつかえないのです。これをつぶしたインクは長く色が変わりませんから、ペンや筆で字や画を書いて葉書や手紙を出したらちょっとおもしろい。こういうふうの一つの植物についてあれこれと知っていくとだんだんおもしろくなってきます。大體植物毒は葉にもなるのですが、用法を誤るといけません。そんな植物はずい分たくさんあります。

クワ——それからそこにクワが生えてますね。クワの葉で蚕を飼うのですから、この葉が絹糸になるんだと思えば、見逃すわけにはいきません。クワは雄と雌の木が別々ですから実のなる木とならない木があります。実が熟すと食べられます。クワの実の熟する頃、などという言葉を覚えていただけでも、何か文学少女じゃないかと思われたりでしょう。このクワはゴムの仲間です。いや、ゴムがクワの仲間なんですから、クワ科の植物はどこか似たところがあります。ゴムとイチジクもよく似ていますね。イチジクもクワの仲間です。このように植物には、すべて名前もついているし、グループもはっきり分けられています。親戚同志がちやんとあるのです。その一つ一つをあれは何だ、これは何だと覚えていくのはたいへんかもしれませんが、おもしろいと思つたものは必ずおぼえていくようにするのが大事なことです。植物名を覚えるには、いんちきな名前を覚えては困りますから、正しい植物学上の名前を覚えてください。

名前のおぼえかた——ツユクサといえば、夏の、真青な花が咲いてそれが朝露に濡れているのはいいものです。それでツユクサというわけです。可憐だといえはスミレの花、昔からスミレはスミレです。意味が判らなければただスミレと覚えるより外にありませんが、大工さんが家を建てる時に、板に筋をつけたりする墨入れ、墨のついた糸をぐるぐる巻いて、ヒューと伸ばしてボンとはじくと墨の線がつくでしょう。そこにのこぎりを入れるんですけれど。スミレの花の蜜袋がこの墨入れにとでもよく似ているので、スミイレがスミーレ、スミレとなったんです。ああそうか、それはおもしろいなということで、小さな子どもでもそういう名をチャンと覚えられます。植物の名前がどうしてできたかを考えてみてください。

秋に咲くキクの花——キクはなぜキクというのか聞くまでもないというでしょうが「菊」という字は昔中国からきたものです。これを中国ではこれをチュと読みます。ところがチュという音は日本人にはとてもできない、だから仕様がなからはずきりとクという字をつけて、チュクと読んだのです。こういう音はその性質上チュクともキクとも発音できるのです。

新潟の西頸城郡の人たちは大きなケヤキの木というのをオーチナエノチノチと発音するのを見てわかりました。キキョウなども聞きようがないなどといわないでよくしらべると「桔梗」という

字が中国から入れられたものだとということがすぐわかります。

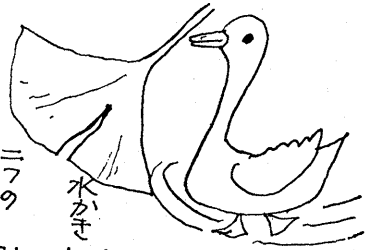
イチヨウはどうでしょう。イチヨウという木は日本にたくさんあります。街路樹として日本が世界に誇る木です。中国と日本の特産の木ですからこれは外国にはない。あのイチヨウの葉がワーと茂った様子は大変きれいです。秋は黄色に染まってきれいですし、銀杏返しに似た葉もきれいです。大変長生きするし、丈夫だし、火事で黒コゲになっても五年も経つとまた芽を吹くのです。イチヨウの木がまるつきり燃えたということは絶対にないのです。必ずできてきます。イチヨウをどうしてイチヨウというか、中国では、鴨脚と書いてアーチャオとかイーチャオといっています。それを日本人が真似しているうちにイチヨウになりました。しかし日本には、はじめ字がなかったので、中国字そのまま「銀杏」「公孫樹」という字を書いています。

学問上の名——明治初年にはヨーロッパ人がラテン語やギリシヤ語でつけた植物の名前を日本にも伝えたもので、学問上の名前は世界共通でなければならぬという建前から学名がつけられたのです。スウェーデンのリンネという植物分類学者は世界中のほとんどの植物の学名をつけている。牧野さんの何十倍も何百倍も名前をつけています。それがヨーロッパの言葉のクラシックであるギリシヤ語、ラテン語でつけられています。植物学上の名はすべて学問上の名前、即ち学名で発表することになっています。

明治初年にやってきた植物学者シーボルトは日本の植物にもたくさん名前をつけていきました。ところが外国にないものは日本の名前を尊重して *seibo* と名をつけた方がいいのですが、タイプライターもない時代のことでしたから筆記のあやまりで *y* が *g* になっていった。それが意味も何もわからないものですからそのまま通って正式にリストアップされたのが *seibo* (ギンクゴ) になって、今日でもミスのまま通用しているのです。植物学の本を見て下さい。字名は *ginkgo* になっています。ところがギンクゴでは *k* が途中にはいってくるので読むわけにいかない。それはサイレントになって「ギンゴ」といっています。ですから英名もフランス名もドイツ名もギンゴです。

リンネは植物を属名と種名という二つの名前をつけて、そして命名者の名前をつけてこれを学名とし、属、種と二つ並べてリンネの二名法といいました。学術論文を発表する場合は、この学名を使わなければ通らないのです。どんなことを調べても……

分類の基準は動植物ともに界門綱目科属種に分けています。園芸ではその種をさらに変種だとか品種に分けているわけです。常普段使っているのは属と種だけをもって、これだけで植物をあらわすことができるわけです。変種があればバラエティの何々という名前をつけて学問上発表するのです。しかし日本名とか洋名とかいう場合にはそういうことによらず、ただ簡単な名前がキキョ



ニフウ
水かき
Bi Lobe
Ginkgo biloba L.

ウだとか、八重のキキ
ヨウなら八重咲きのキ
キヨウだとか、白い花
なら白花のキキヨウだ
とか、そういう名前が
ついているわけです。
ところが昔からある
ものは何の意味もなく
ついているような場合
がよくありますね。例

えばハギの花、いくら考えてもハギという意味はわからない。こ
れはハギだということ覚えてしまふより外どうしようもありません。
せん。人がはつきりという意味をつけた名前が次第に多くなつていま
す。八つ手、八つ手というのは八つの手がでているから八つ手と
いうのです。これは日本の植物です。学名はハットシアです。そ
れから属名も種名もいろんな植物の性質を表わしています。

イチヨウの属名はギンゴですが、種名には biloba というのが
ついています。 biloba というのはラテン語で二つという意味です。

Loba というのは水鳥の水かきという意味で、あひるの脚のよう
な葉をしていますから二つの水かき即ちビローバという名前がつ
いています。また金魚に似ているからキンギョソウ、千鳥に似て

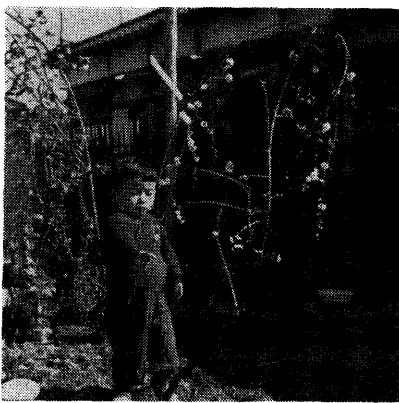
いるからチドリソウとか、もめばシャボンのような泡が出るから
シャボンソウ、朝に咲くからアサガオ、昼に咲くからヒルガオ、
夜に咲くからヨルガオというわけです。

ウメはどうですか。食べてウメエからいやそれは中国で梅をメ
イト読むから、それが日本にはいつてきてメイがウメエになった
のです。いろいろありますが、日本語と漢字の間にいろいろとお
もしろい関係があります。

明治時代は開国日本というわけで鎖国から開放されて欧米から
の植物も日本にドシドシ入りました。文化も持ってきたけれど
も、植物も持つてきました。ベチニアだとかペゴニアだとかコリ
ウスだとか、日本名もつけてあるが、外来の名そのまま通用す
るようになった草花も

ずい分多いものです。

ツリガネソウはベル
フラワー、スズランは
リリオプザバレイで
日本で直訳のまま呼ん
でいる場合もありま
す。それは英名、ドイツ
名、フランス名直接い
う場合もあり、ライラ



むかし中国からきたという梅



ツクの花をリラといっ
たり、地面が真白にな
るほど咲きますからエ
ーデルワイスなどその
ままです。学名がその
ままという、コスモ
ス、コリウス、ペゴニ
アといったたいぐいもず
い分あります。

外国名で呼ぶ方が何

か新しいような気がして何でも外来語で呼ぶ気分も多かった時代に園芸界の人が呼んだそのまま、一般の人にも伝わって覚えられてしまっていることも多いのです。

いずれにせよ覚え易い名前を覚えればいいし、それから世間で通る名前を覚えればいいわけです。それやこれで植物の名前を楽しく覚えて、そしてその性質を理解してそれを巧みに利用していきたいものです。

この教室の裏手にチューリップの木というのがあります。日本名はユリの木。またの名をチューリップの木。花が咲きますと、上の方でチューリップのような花が咲くのです。それがユリのよ
うな花でもあります。モクレンの仲間ですが、ユリのような花が

モクレン *Magnolia liliflora*



咲きますからユリの木
といっています。とこ
ろがまたの名前がある
のです。ハンテンボク
というのです。この木
の葉が魚屋のアンチャ
ンの印ばんによく
似ているのです。小さ
な幼稚園の子どもたち
が、この葉をおし葉に
して色をぬり、頭にね
じりはち巻くと、足を
紙でベラベラとくっつ
ければ、魚屋のアンチ

ャンができます。かわいさかなやさんというわけでハンテンボクだというのを三才の童子がちゃんと覚えてくれる。そういう時に覚えたということは、絶対に忘れないことなのです。よく子ども
の時に教わったことは忘れな
いといわれま
すけれども、このや
わらかい、非
常に詩情豊
かな吸収力
の強い時に
そういうやさ
しい先生や
親御さんが
いれば、子
どもたちは
もともとと
素晴らしく
育つこと
でしょう。と
ころで、こ
の学名もつ
いでに覚え
てもらい

ましよう。これは *liiodendron tulipifera*、リリオデンドロンが属名、チューリップフェラが種名、命名者はリンネ。これはラテン語でユリのような花が咲きますから、リリオというのです。デンドロというのには木という意味で、ユリの木と直訳したわけです。明治時代に日本にはいつて来ましたから、この木が一番最初にはいつてきたのは大正二年、五十三年前にシベリア鉄道を経由してわずか十本の苗木が今の千葉大学の前身に送られてきたわけです。それが今大きくなっています。その時代にようやく日本にはいつてきたわけです。チューリップとはトルコの帽子、花の格好が似ているというのでチューリップフェラ(花)というのです。

このチューリップの木は枝の上の方で花が咲きます。花がオレンジ色がかって緑色の花、うすいもえぎ色の花。保護色で花が上を向いて咲いていますから見上げても見えません。ヘリコプターから見るとよくわかるのですが、とても美しい花なんです。

さてリリオという言葉はユリと覚えましたが、そうするとみんなの知っているこれは何でしょう。そうハクモクレンです。モクレンの属名は *magnolia* 種名は *liliflora* です。リリはユリ、フェラヤフロラは花という意味。ところが同じマグノリア属でタイサンボクというのがあります。葉が大きくて、真白い大きい花です。だからマグノリア、グランディフロラという学名がついているのです。グランディというの大きいという意味。つまり大きな花

というわけでどんどん学名も覚えられますね。こぶしの花はにぎりこぶしみたいな実が成るからコブシというのですが、あれは日本にしかないから、学名もマグノリア・コブス、とつけられています。こうしてマグノリア属いっぺんに三つ覚えられ、学名さえおもしろく覚えられる方法があるというわけです。

それではもう一つ、ランの中にデンドロビウムという美しいのがあるでしょう。ビウムとは生えるという意味でこのランは木に生えているのだから空気のしめりで育っていくわけです。これは水ごけに包んで木の枝にぶら下げておけばよろしい。ランには肥料は全然いらぬのです。というのは根の中ならん菌という菌が寄生していて、そして空中の窒素を固定してくれますから肥料は全然いらぬのです。それでランはただ石とか水ごけとかそういうもので植えておきさえすれば手がかからず育ちます。

Rhododendron というのはツツジの仲間が全部ロードデンドロンという属名なんです。ロードというのは赤いという意味、シャクナゲの仲間もロードデンドロンです。シャクナゲの木の皮をむいて、小刀で削ってごらん下さい。真赤な血のしたたるような色をしています。で、赤い木という意味です。

— つづく —

(千葉大学)
(この稿は、お茶の水女子大学での講義記録に加筆、訂正されたものです)